

# Pearl S. Buck と障害をもつ登場人物——Disability Studies の視点で *The Good Earth* (1931) と *Sons* (1932) を読み直す

川端 理恵

## はじめに

障害学の創始者の一人といわれる Irving Kenneth Zola は自伝 *Missing Pieces: A Chronicle of Living With a Disability* のプロローグ冒頭において自らのことを次のように述べる、“I am by professional training both a social observer and a psychological counselor. Yet for over two decades I have succeeded in hiding a piece of myself from my own view. Given the obviousness of my physical handicap this has taken some doing” (Zola 2)。ゾラが独白しているように、従来、いわゆる障害を直視することは難しいことであった。それゆえ語ることは、より困難なことであったといえる。しかし、20 世紀末に障害学という新しい学問領域が登場し、さらにアメリカにおける 1990 年の「障害をもつアメリカ人法」(Americans with Disabilities Act (ADA)) をはじめ、各国で障害をもつ人々の権利を保障する法整備が進み始めたことから、障害にまつわる状況は劇的に変化してきた。<sup>1</sup> 長瀬修によると、障害学とは「障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動である。それは従来の医療、社会福祉の視点から障害、障害者をとらえるものではない。」それはむしろ「障害者が持つ独自の価値・文化を探る視点を確立する」ものである(長瀬 11-12)。障害学が現在盛んに研究されている分野であること、さらにその応用範囲が広がりつつあることは、1997 年に *The Disability Studies Reader* 第 1 版が出版された後、2013 年にすでに第 4 版が出版されていることから察せられる。

20 世紀初頭に台頭した優生学が、障害をもつ人々を社会的に圧迫してきた状況は、アメリカ文学においても読み取ることができる。<sup>2</sup> William Faulkner (1897-1962) は 1929 年に *The Sound and the Fury* を出版するが、語り手として障害をもっていると思われる Benjy が登場する。ベンジーの障害は作中で少しずつ明らかにされる。ベンジーには肢体不自由があり、さらに感情を言葉で伝えることが難しいため、いわゆるパニック症状によって感情を表出していることがわかってくる。こうしたベンジーは、しばしば周囲の人々からうとまれる。

## 2 川端 理恵

ベンジーの生みの母親は、アメリカ南部における名家の古い価値観とキリスト教信仰とヴィクトリア朝的価値観を重んじる人物として描かれており、“... Benjamin was punishment enough. . . . I thought that Benjamin was punishment enough for any sins I have committed. . . .” (Faulkner 102-3) と言い、ベンジーの障害は、自分が犯した罪に対する罰であると思っている。さらにベンジーは、女の子に襲いかかろうとしたことを理由に、去勢されてしまう。一家は没落の途をたどっていき、Appendix によると、結局ベンジーは州立施設に収容される。<sup>3</sup> 他方、John Steinbeck (1902-68) は、1937年に *Of Mice and Men* を出版する。主人公は軽度の知的障害をもっていると思われる Lennie と親友の George で、作品舞台は1929年の世界恐慌後の経済不況に襲われていた、カリフォルニアの厳しい農業社会である。レニーはジョージと一緒に農場で雇われ、うさぎを飼って友人と一緒に暮らすことを夢見て働くが、農場の同僚からは犬にたとえられ、遊び仲間とみなされない。そしてある日、レニーは意図せず農場主の妻を絞殺してしまい、結局レニーはジョージによって命を断たれる。これら2作品には、20世紀初頭、障害をもつ人々は本人の意思に関係なく去勢され、施設に収容され、そして命を奪われることもありえた、と作者たちが認識していたことを読み取ることができる。しかし、こうした認識とは異なる認識をもって、障害をもつ人々が登場するフィクションを創作した作家がいる。それが Pearl S. Buck (1892-1973) である。

バックは1938年にノーベル文学賞を受賞し、作家として、また女性や、アフリカ系アメリカ人<sup>4</sup> や日系アメリカ人<sup>5</sup> などの人権を擁護する社会活動家として活躍した。Paul A. Doyle は、バックの作品について、特に1939年以降、技術的な実験、より深いキャラクター分析、ムードやトーンの微妙さの追求、神話やシンボリズムの活用などを行わなかったため、彼女の作品には当時の文芸批評が求める、意味の重層性や複雑性が備わらなかったと言う。また出来事や登場人物を強調する時代遅れな中国の物語の慣習にならったため、1930年代には客観性を保っていたものの、1939年以降は教訓主義が前面に出るようになった。さらに彼女の楽観的で肯定的な視点は、厳格な批評家たちからの名声を得ることを困難にしたと指摘する (Doyle 151-4)。Peter Conn によると、第二次大戦後の数年間でバックの文学的名声は弱まり消えた (Conn xvii)。しかし、1992年にバックの母校で生誕100周年を記念するシンポジウムが開催され、バックに対する再評価が始まる。1994年に同シンポジウムにおける講演と研究発表をまとめた論文集が出版され、1996年にはコンによるバックの伝記 *Pearl S. Buck: A Cultural Biography* が出版された。また1992年にバックと日本の関係を

考察する Dalma H. Brunauer, “Pearl S. Buck in Japan”が発表され、1997年には Yoshihara Mariによるジェンダーと民俗学に着目してバックの作品を論じる第三章を含む博士論文がブラウン大学に受理された。さらに2003年にジェンダーの視点で家父長制を分析する Eleanor Pam, “Patriarchy and Property: Women in Pearl S. Buck’s *The Good Earth* (1931)”が発表され、2006年には *New York Times Book Review* に Mike Meyer, “Pearl of the Orient”が掲載された。

バックの再評価が進む中で、バックの知的障害をもつ長女にも再び脚光が当てられるようになった。長女がバックの人生と作品に大きな影響を与えていることは、すでにこれまでしばしば指摘されてきている。<sup>6</sup> しかしながら、障害学の視点から、長女が彼女の作品に与えた影響について考察しているものについては、2012年にカンザス大学に受理された、Margaret Rayburn Kramerによる博士論文“Plotting Life Writing through Various Disability Models”を除くと、ほとんどみられないようである。<sup>7</sup> 長女は、1920年3月4日に生まれ、Caroline Grace と名づけられキャロルと呼ばれるが、当時は病気そのものの解明もされていなかったフェニルケトン尿症を患っており、知的障害をもつこととなった (Conn 71)。バックはその後養子を迎えるが、知的障害をもつキャロルの存在を、長い間公にしなかった。1930年に *East Wind: West Wind* を発表して小説家として認知されるようになるが、約20年間、キャロルの存在を隠し通したのである。しかしコンによると、バックは施設で生活するキャロルへのクリスマス・ギフトのリストを30年以上作り続け (Conn 365)、晩年に公人としての活動から身を引き始めても、例外としてキャロルが入所する私立施設 Vineland Training School の理事をさらに数年務めている (Conn 356)。また、私的な書簡、エッセイ、そして小説にも、長女がバックに与えた影響を認めることができる。<sup>8</sup>

バックはキャロルのことを、1950年にエッセイ *The Child Who Never Grew*<sup>9</sup> によって、初めて公にする。その冒頭の部分で、バックはキャロルによって、「悲しみ」と「受け入れること」という経験を得たと、次のように記している。

I have been a long time making up my mind to write this story. It is a true one, and that makes it hard to tell. . . . They [parents with a child like me] ask two things of me: first, what they shall do for their children; and, second, how shall they bear the sorrow of having such a child?

The first question I can answer, but the second is difficult indeed, for endurance of inescapable sorrow is something which has to be learned

#### 4 川端 理恵

alone. . . . There must be acceptance and the knowledge that sorrow fully accepted brings its own gifts. For there is an alchemy in sorrow. It can be transmuted into wisdom, which, if it does not bring joy, can yet bring happiness. (Buck, *Child* 25, emphasis mine)

障害をもつ子どもの親から、子どものために何ができるのか、またどのようにして子どもが障害をもっている悲しみに耐えるべきなのかと手紙で尋ねられ、一つ目の質問については答えることができるけれど、悲しみに耐えることは一人で学ぶべきことで、そのためには受け入れることが必要であるが、十分に受け入れられた悲しみはギフトをもたらし、喜びをもたらすことはなくても、幸せをもたらさうと、と記すのである。この言葉が当時、そして今なお、障害をもつ子どもの親を励ますであろうことは想像に難くない。

しかしここで、「障害」について、障害学の視点から言及しておかなければならないことがある。杉野昭博によると、障害学の理論的核心は「障害の社会モデル」と呼ばれる認識枠組みである。<sup>10</sup> 本稿3節で述べるが、例えばイギリスの社会モデルは、「障害」を「制度的障壁」ととらえる(杉野 113)。したがって、障害をもつ子どもの親は、理論上は、子どもの障害を、個人的な問題として悲しまなくてもよいのである。障害を、個人の問題を超えた、より大きな社会の問題としてとらえるからである。さらに、障害をアイデンティティとみなす場合は、文化的でマイノリティなアイデンティティとみなし、社会変化を起こすことができるアイデンティティとみなす。障害をアイデンティティとしてとらえる場合は、肯定的にとらえる傾向が強いといえるのである。<sup>11</sup> つまり、バックは「障害者の親」という立場にあり、「障害問題にコミットはしていても」、「必ずしも当事者視点を共有しているわけではない」(杉野 35) かもしれないのである。<sup>12</sup> しかしながら、本稿2節で述べるが、バックは、障害をもつ人々を社会的に排除しようとした優生学が台頭していた20世紀前半に、障害という観点をとり入れた作品を執筆し、発表した。こうした彼女の作品を、現代の障害学の視点から読み直す試みは全く意味がない、とも言い切れないのではなかろうか。

そこで本稿では、バックの作品にみられる、障害をもつ娘を出産して育てたバック自身の感情や考えを指摘したうえで、障害学の知見を援用して、それらの言及について検討する。それにより、キャロルの知的障害に悲しみを感じていたバックに、一定の期間を経ると、障害を前向きにとらえる考えが芽生えていたことが、作品の中に読みとることができることを示し、また、そうした彼

女の障害のとらえ方の特徴を、障害学の理論によって明らかにすることを試みる。

より具体的には、バックの作品の中で最も有名で、キャロルを施設へ預けてまもなく執筆された、*The Good Earth* (1931) およびその後継作品である *Sons* (1932) に登場する、主人公 Wang Lung の知的障害をもつ長女に着目し、バックの実生活の影響について考察する。また、知的障害をもつ長女が地域社会で生活していることに着目し、長女と父親と他の登場人物との関係を考察した上で、障害をもつ人物が地域社会で生活する様子が描写されている意義を考察し、同時にこの描写に内在する問題についても言及する。そして、これらの 2 作品に登場する障害をもつと考えられる登場人物の生活の描写に着目し、それらを障害学の視点から考察することによって、作品の根底にあるバックの世界観を読み取り、同時に、障害学における重要な観点についても言及する。

### 1. 主人公ワン・ルンと知的障害をもつ長女とバックの実体験

『大地』において、知的障害がある長女は、常に家族と一緒に生活している。彼女はワン・ルンの故郷の農村で生まれるが、長女が生まれてすぐに大規模な飢饉が襲い、人々は自分の娘を金持ちに奴隷として売ったり、子供を食べたり、餓死する。しかし、ワン・ルンはどんなに食べるものに困っても、所有する土地や長女を売ることなく、一家で南の都市へと移動する。移動手段は徒歩であったが、長女は母親の O-Lan に抱かれて家族と一緒に移動する。南の都市で長女は母親に抱かれて兄弟と一緒に物乞いをし、歩けるようになると祖父と一緒に過ごす。オーランは郷里に帰る資金を得るために、長女を売ることを提案するが、ワン・ルンが反対する。その後、敵軍によって暴動が起こり、ワン・ルンは強奪をする他の民衆と一緒にになって、金持ちの家で銀貨を奪う。資金を得た家族は郷里に戻ることになる。郷里に戻っても、長女は引き続きワン・ルンの家族と一緒に暮らし、オーランが暴動の際に入手した宝石のおかげで、家族の生活は豊かになる。ワン・ルンは第二夫人を邸宅に住ませ、兄二人と妹はそれぞれ結婚し、オーランは病気で亡くなり、ワン・ルンの家族は町の豪邸に転居し、おじ一家と同居するようになる。このように家族構成は変化していくが、長女は常にワン・ルンと一緒に暮らす。ワン・ルンが死を意識するようになると、長女はワン・ルンの第三夫人である Pear Blossom に世話をしてもらうようになり、ワン・ルンとペア・ブロッサムと一緒に、田園のなかの土の家で暮らすようになる。

ここで、知的障害をもつ長女とワン・ルンの関係を考察するため、長女の呼

## 6 川端 理恵

び方<sup>13</sup>に着目してみたい。長女は女の子という意味で *the girl, the girl child* あるいは *the elder daughter* などと呼ばれる一方で、*fool* とも呼ばれている。*fool* は、西洋文化において様々な文脈で登場する言葉である。例えば、F. Scott Fitzgerald (1896-1940) の *The Great Gatsby* (1925) においてヒロイン Daisy は女の子について次のように言う、“I’m glad it’s a girl. And I hope she’ll be a fool—that’s the best thing a girl can be in this world, a beautiful little fool” (Fitzgerald 22)。しかし、本作品において知的障害をもつ長女が *fool* とよばれているのは、可愛いおばかな女の子、あるいは道化師という意味ではなく、文字通りに知的障害をもっているためであると思われる。

ワン・ルンが長女を指して *fool* と呼ぶ回数<sup>14</sup> は、語り手に次いで多く、変化が認められる。最初は *poor fool* と呼び、その後 *poor little fool* あるいは *little fool* という呼び方に変化する。そして中盤頃に、ワン・ルンは長女のことを “*my poor little fool*” と呼ぶ (Buck, *Good* 159)。 *poor little fool* に *my* という一人称代名詞の所有格がつくのである。ワン・ルンが長女の呼び方に *my* をつけるようになった場面は、長女には年齢相応の体の成長がみられるにもかかわらず、話すことができないということを嘆く、以下のシーンである。

Wang Lung had, therefore, at this time no sorrow of any kind, unless it was this sorrow, that his eldest girl child neither spoke nor did those things which were right for her age, but only smiled her baby smile still when she caught her father’s glance. Whether it was the desperate first year of her life or the starving or what it was, month after month went past and Wang Lung waited for the first words to come from her lips, even for his name which the children called him, “da-da.” But no sound came, only the sweet, empty smile, and when he looked at her he groaned forth,

“Little fool—my poor little fool—” (Buck, *Good* 159)

引用にあるように、ワン・ルンはどんな悲しみももっていなかったが、ただ一つ、長女が話をする年になってもまだ話をしないということに悲しみを感じており、おもわず “*my poor little fool*” と呼ぶのである。そして長女を奴隷として売っていたら殺されていただろうと想像して嘆き、まるでおわびをするかのように、ときどき長女と一緒に畑へ連れて行くようになるのである。

この知的障害をもつ長女には、Deborah Clement Raessler も指摘しているが、

バックの娘キャロルが投影されていると思われる。ここでバック自身の自伝的背景に目を向けてみると、キャロルは3歳になっても話をしなかったが、バックの夫はますます仕事に没頭し、バックは家のこととキャロルのことでフラストレーションがたまり、結婚生活はうまくいかなくなる (Conn 77)。1924年の春には、もはやキャロルの成長はゆっくりしているだけと思い込むこともできなくなる。キャロルはもっとも基本的な作業もできず、まだ話をすることもできなかった (Conn 78)。バックはキャロルにふさわしい世界を見つける必要があると考えるようになり、ある出来事によって、その考えは確信に変わる。それは、キャロルと同年齢のアメリカ人の女の子が、キャロルのことを“*your poor little girl*”と呼び、これ以上私のパーティーに呼んではいけないとお母さんに言われたと告げる、次の出来事である。

Again an incident, very slight in itself, crystallized my thinking. We had some American neighbors in our big Chinese community, and one of the neighbors had a little girl just the age of mine. They had gone to each other's parties. One day, however, the other little girl, having come over to play, was prattling as little girls will, and she said, "My mamma says don't have your poor little girl any more to my party, and so I can't ever have her next time." (Buck, *Child* 57, emphasis mine)

実生活では、“*your poor little girl*”という言葉がきっかけとなり、バックはキャロルにふさわしい施設を探す決意をすることとなる。他方、作品においては、ワン・ルンは“*my poor little fool*”という言葉を発表して、より一層長女の世話をするようになる。“*your poor little girl*”と“*my poor little fool*”は、少し言葉は違うけれども、バックの実体験が、作品に影響を与えていることは否定できないのではなかろうか。あたかも、実生活においてバックがキャロルにできなかったことを、作品においてワン・ルンが行っているかのように思われるのである。次節では、地域社会という観点から、知的障害をもつ長女の生活についてさらに考察したい。

## 2. 知的障害をもつ長女と地域社会における生活

ここでは、ワン・ルンの知的障害をもつ長女が地域社会で生活している様子を取りあげて、20世紀初頭における障害をもった人々を取りまく社会状況と、地域生活で生活する意義とそこに内在する問題、について考察したい。

## 8 川端 理恵

前節でみたように、家長<sup>15</sup>であるワン・ルンが長女を心から可愛がっているため、家族が長女の知的障害に対して表立って文句を言うことはほとんどない。しかし誰1人として長女のことを悪く思っていないかといえそうではなく、少なくとも家族のうち2人は、明らかに長女のことを嫌っている。1人は、ワン・ルンの第二夫人の Lotus である。ある日、ロータスの住む屋敷の庭に、ワン・ルンの幼い子供たちが、長女を連れて一緒に入ってくる。ロータスは初めて長女を見ることとなるが、長女がロータスの鮮やかなシルクの服や耳飾りを見て手をのばして笑ったところ、怖がって叫び声をあげ、走ってきたワン・ルンに向かって、長女を指差しながら文句をあびせかける——“I will not stay in this house if that one [the elder daughter] comes near me. . .” (Buck, *Good* 209)。ワン・ルンはロータスの罵声を聞いて怒り、次のように言う、“Now I will not hear my children cursed, no and not by any one and not even my poor fool. . .” (Buck, *Good* 209)。そして長女のことをめぐってロータスと対立した2日後に、ワン・ルンはロータスのところを訪れるが、ロータスに以前のような愛情を感じないことに気づく。長女のことを罵倒したロータスは、自分をお金で買い取ってくれた文字通りの主人であるワン・ルンの愛情を失うという罰を、結果として与えられたのである。

もう1人はワン・ルンの長男の妻である。長男の妻は、死に際のワン・ルンの妻オーランから、長女のことを頼まれたにもかかわらず、長女のことを嫌っている。このことを知っているワン・ルンは、一家が町の豪邸へ転居するとき、自分が長女を連れて行かなければ、自分以外に長女の世話をする人がいないのだと長男に言って、言外にその妻を非難する——“This Wang Lung said in some reproach to the wife of his eldest son, for she would not suffer the poor fool near her, but was finicking and squeamish and she said, ‘Such an one [the elder daughter] should not be alive at all, and it is enough to mar the child in me to look at her [the elder daughter]’” (Buck, *Good* 295)。長男の妻は、長女が近くにいることに耐えられず、長女なんて生きているべきではなく、長女を見るだけでお腹の中の胎児に悪影響が及んでしまう、という発言をしていた。ワン・ルンは長男に、この妻の偏見に満ちた言動を思い出させたのである。

このように家族の中に長女を嫌っている者がいることは明らかである。しかし家長であるワン・ルンが、長女を嫌う家族をけん制して長女のことを守っているおかげで、長女は家族の中で生活することができるのである。ワン・ルンもこのことを自覚しており、自分が死んだあとに残される長女のことを心配でならない。そこで悩んだ末にワン・ルンは、自分が死ぬときには長女も一緒に



死ぬことにしようと毒薬を準備するのである。

Now Wang Lung had thought many times of what would come to his poor fool when he was dead and there was not another one except himself who cared whether she lived or starved, and so he had bought a little bundle of white poisonous stuff at the medicine shop, and he had said to himself that he would give it to his fool to eat when he saw his own death was near. (Buck, *Good* 348-49)

食事の世話をしてもらえず、雨が降ろうが寒かろうが誰にもかまってもらえなくなる長女のことが不憫で、ついにワン・ルンは、自分が死んだら、毒薬を混ぜたご飯で長女を毒殺してほしいと、第三夫人のペア・ブロッサムに頼む。

“There is none other but you to whom I can leave this poor fool of mine when I am gone. . . . And well I know that no one will trouble when I am gone to feed her or to bring her out of the rain and the cold of winter or to set her in the summer sun, and she will be sent out to wander on the street, perhaps—this poor thing who has had care all her life from her mother and from me. Now here is a gate of safety for her in this packet, and when I die, after I am dead, you are to mix it in her rice and let her eat it, that she may follow me where I am. And so shall I be at ease.” (Buck, *Good* 349)

しかしペア・ブロッサムは、小さな虫でさえも殺せないのに長女のことを殺すことなどできないと言い、自分が長女の世話をすると提案する。するとワン・ルンは、ペア・ブロッサムが死んだあとのことが心配になる。息子たちの妻は自分の子供たちの世話や口げんかで忙しいし、息子たちは男だから長女のことなど気にかけないと言い、やはり毒薬をペア・ブロッサムに渡そうとする。ワン・ルンの心情を察して、ペア・ブロッサムが毒薬を受け取ると、ワン・ルンはやっと安心を得る。ワン・ルンの死後の様子は、続編の『息子たち』に描かれている。ペア・ブロッサムは長女のことを守って、田園の中に建つ土の家に一緒に住み続ける。長女は、地域社会の中でひっそりと暮らして、白髪になるまで生きて亡くなるのである。

このように地域社会で暮らし続けた知的障害をもつ長女の姿から、「障害をもつ人々が地域社会において生活すること」という論点が浮かび上がる。バック

が本作品を執筆した当時、西洋社会では優生学が台頭していた。<sup>16</sup> Lennard J. Davisによると、アメリカをはじめとする西洋社会では、19世紀末から、障害をもつ人々は、逸脱あるいは進化上の欠陥とみなされ、優生学によって社会から排除された (Davis 3)。そしてバックは実際に、アメリカ国内の州立と私立のさまざまな施設を訪れており、膨大な数の障害をもつ人々が、社会から排除され、施設に収容されていた状況を、直接見て知っていた (Buck, *Child* 65-71)。

他方、バックは、中国の社会状況は、西洋の社会状況とは異なっていると認識していた。中国人の友人に、キャロルをアメリカの施設に入所させることについて相談したときのことを、バックは次のように記している。

When I told one or two of my closest Chinese friends what I had decided upon, they were very much perturbed. Chinese do not believe in institutions. They feel that the helpless, young and old, should be cared for by the family, reasoning, and quite truly, that no stranger, however kind, can be trusted to be as kind as the family. There are no homes for the old in China, no orphanages except those started through western influence, no places for the insane or for the mentally defective. Such persons are cared for entirely at home, as long as they live. (Buck, *Child* 58)

これはキャロルがアメリカの施設に入所する以前の1920年代頃のことである。友人によると、中国には、老人や障害をもつ人々の入所施設は、西洋の影響で始まったいわゆる孤児院以外には存在しておらず、そうした人々は、家族の世話のもとで、家で一生暮らしたというのである。バックは、長期間にわたる自らの中国での生活経験と、友人との会話に基づいて、中国の社会状況は西洋とは異なるものである、と認識していたのである。

実際に中国に入所施設が存在していなかったのかというと、そうではない。例えば、夫馬進『中国善会善堂史研究』(1997)によると、19世紀前半、「欧米人の間では、キリスト教の支配しない社会では病院やその他の救済施設は無いものだ、とするのが一般的な考え方であつたらしい」が、中国では、ヨーロッパ社会やキリスト教の影響を受けたわけでもないのに、それらが早くから存在していたという。1720年にイエズス会の宣教師ダントルコルは、中国固有のいわば福祉の民間の結社といえる善会と、その施設である善堂、及び国家による福祉政策について手紙で伝えている。また中国研究雑誌『チャイニーズ・リポジトリ』は、1833年号から広州の育嬰堂・養濟院、痲瘋院（ハンセン病患者

収容施設)について記述し、『チャイナ・レビュー』1873年号は、「当時広州に置かれていた官営の育嬰堂・老人堂(男老人ホーム)・普濟院(女老人ホーム)・癈瘋院(癈瘋院のこと)・瞽目院(盲人用施設)」を紹介しており、さらに同1874年号は、民営の「愛育善堂」を紹介している。また中国人でクリスチャンであったヨウ・ユエ=ツーによって英文で書かれ、アメリカで出版された『中国慈善博愛精神』(1912)は、善会と善堂を高く評価している(夫馬 4-12)。つまり、バックの中国社会の認識は、あくまでも個人的な独自の認識であったといえる。

バックは中国の社会状況について自分の認識に基づいて、地域社会で障害をもつ人が生活するというプロットを得たのではないかと推測される。そして完成した『大地』を、アメリカで出版したのである。障害をもつ人が地域社会で生活するという論点を、優生学の影響下にあった当時の西洋社会に投げかけたのである。先に紹介したように、『大地』とほぼ同時期に出版された『響きと怒り』と『はつかねずみと人間』では、障害をもつ人々は去勢され、施設に収容され、あるいは命を奪われており、優生学の影響を強く読み取ることができる。これらの作品に比べて、『大地』は、障害をもつ長女が一生を通じて地域社会で生活するという点において、優生学よりも、現代の障害学に近いといえる。障害学において、地域社会において生活することという論点が重要であることは、イギリスの障害学の芽生えが「入所施設に対する抵抗」にあり、1970年代から「入所施設は「社会的な死」を意味するとして、地域で暮らす権利を求めた」ことから窺える(長瀬 14-5)。また、「ノーマライゼーションの原理」<sup>17</sup>においても、「知的障害者も一般社会または可能なかぎりそれに近い状態の日常生活やライフパターンを経験するべきである」とされている(ニリィエ 112)。

しかし、障害学の視点から見たとき、ここには同時に、重大な問題も読み取ることができる。バックが描き出した地域社会は、障害をもつ人々を積極的に支援することはない。あくまでも、家族が障害をもつ人を支え、すべての責任を負っている。つまり、作品に描かれている地域社会は、障害を個人の問題とみなす、旧来の視点で描かれているといえる。障害を個人的問題とみなすと、個人に重い責任を生じさせることとなり、障害当事者や家族に重大な事態が生じることがある。Faye Ginsburg と Rayna Rapp によると、こうした事態は、家族や社会において起こり続けており、排除のスキャンダル(“scandals of exclusion”)として、メディアで時々報道されているという(Ginsburg 186)。ワン・ルンが自分の死後を案じて、長女の毒殺を考えたことは、まさにこうした事態を象徴している。そしてワン・ルンの長女が亡くなったときに、ペア・ブロッサムによって発せられる次の言葉もまた、象徴的である——“Death has

healed her and made her wise at last. She is like any of us now” (Buck *Sons* 293)。知的障害をもっていた長女は死をもって癒された、今や彼女は私たちみんなと同じです、という言葉には、家族の複雑な心情に加え、障害を個人的問題としてとらえることに対する問題提起も読み取ることができるのである。<sup>18</sup>

ここまでみてきたように、2 作品には、障害をもつ人が地域社会で生活をする様子が描写されている。この地域社会の描写は、障害をもつ人々をとりまく中国社会に関する独自の認識に基づいて生みだされたものであるが、当時台頭していた優生学よりも、現代の障害学に近いものであるといえる。そして同時に、この地域社会の描写は、障害を個人的問題ととらえる旧来の視点が生じさせる問題も提示しているのである。

### 3. 障害の社会モデルによる登場人物の考察——インペアメントとディスアビリティ

『大地』と『息子たち』には、障害をもっていると考えられる登場人物が、ワン・ルンの長女に加え、さらに3人登場する。これら3人の登場人物たちは、社会の中にそれぞれ自分の居場所を見つけて生活している。ここでは、まずこれら3人の登場人物を紹介して、それから障害学の視点からこれらの人物について考察することによって、作品の根底に流れるバックの世界観を読み取りたい。

1人目は、『大地』に登場する。飢饉のときに、ワン・ルンの土地を安く買ったたこうとした、片眼に視覚障害をもつ男性である。この男性がたくましく社会を渡り歩いている様子は、次のワン・ルンとのやりとりに読み取ることができる。

And then one of the men from the city spoke, a man with one eye blind and sunken in his face, and unctuously he said,

“My poor man, we will give you a better price than could be got in these times anywhere for the sake of the boy who is starving. We will give you . . .” he paused and then he said harshly, “we will give you a string of a hundred of pence for an acre!”

Wang Lung laughed bitterly. “Why, that,” he cried, “that is taking my land for a gift. Why, I pay twenty times that when I buy land!” (Buck, *Good* 86)

ワン・ルンはこの男性から、法外に安い土地の取引価格を提示され、その取引価格は公正ではないと叫ぶ。こうしてこの土地の売買は破談となり、ワン・ルンの家族は飢饉の難を逃れるために南に移住することとなる。ワン・ルンとの取引を成立させることは出来なかったが、この視覚障害をもつ男性が、こうした取引をしながら、社会を堂々と渡り歩いていることが想像される。

2人目は、『息子たち』に登場する。Wang the Tiger と呼ばれる、軍人となったワン・ルンの三男の下で働く、口に損傷をもつ the trusty harelipped man という部下である。彼は誠実で、見返りを求めずに親愛の情をもってワン・ザ・タイガーのために仕事をしているため、上官であるワン・ザ・タイガーから信頼されており、大きな仕事を任されている。従って、やはり社会において堂々と仕事をしながら生活している。

3人目も、『息子たち』に登場する。ワン・ルンの長男の三男で、背中が湾曲して肩が隆起している the hunchback という男性である。彼は軍人になるという希望をかなえることができず、親の言うとおりに、寺で僧侶になる。しかしその寺は、この男性が慕うペア・ブロッサムが、ワン・ルンの長女を看取った後、尼として住みこむようになった尼寺に近接していた。つまりこの男性は、軍人になるという希望をかなえることはできなかったけれども、寺という自分の居場所を見つけ、さらに自分が慕うペア・ブロッサムに、毎朝夕に合同で行なわれる読経で会えるようになったのである。

このように、『大地』と『息子たち』では、障害をもっていると思われる人々は、蔑まれることはあるものの、社会に居場所を見つけている。バックが作品舞台として描出する社会は、障害に対して寛容なものとして映るのである。なぜ、このような社会が描かれているのだろうか。前節で考察したとおり、バックは、障害をとりまく中国の社会状況を、自分独自の見聞に基づいて認識していた。しかしバックは、当時の中国社会の状況を、すべて肯定的にとらえていたわけではなく、このことは作品に読みとることができる。たとえば『大地』には、オーランが出産直後の次女を窒息させて殺し、ワン・ルンがその次女の遺体を原っぱに捨ててに行く場面が描かれている。ここには、「女性」の地位を低くみる中国社会に対する批判を読みとることができる。また *The Mother* (1934) では、視覚障害をもつ娘が結婚して遠方に住むようになるが、夫の家族の虐待によって命を落とす。ここには、障害をもつ「女性」に対して、特に冷たい中国社会に対する批判を読みとることができる。つまりバックは、『大地』と『息子たち』の社会状況の設定において、こと障害に関しては、中国では、障害をもつ人々が社会から排除されて施設収容されて生活することなどないのだとい

うバック独自の認識に、さらにフィクションを加えた可能性があるのではないだろうか。ここで思い浮かぶのが、イギリスの障害学において発展した *social model of disability* である。

Tom Shakespeare は、世界の多くの国において、障害をもつ人々が、歴史的抑圧や排除に立ち向かってきた様子について、次のように述べる——“While the problems of disabled people have been explained historically in terms of divine punishment, karma or moral failing, and post-Enlightenment in terms of biological deficit, the disability movement has focused attention onto social oppression, cultural discourse, and environmental barriers” (Shakespeare 214)。そして、障害者の権利と脱施設化に関する世界的な政治状況によって、障害の社会的説明が引き起こされ、アメリカ<sup>19</sup>も例外ではなかったが、特にイギリスにおいて、障害の社会モデルが発展することとなる。なぜなら、イギリスでは、「隔離に反対する身体障害者連盟」(Union of Physically Impaired Against Segregation (UPIAS))による、知的で政治的な議論から起こった社会モデルが、障害をもつ人々の社会的排除に関する構造的分析を提供したからである (Shakespeare 214)。そして、この「社会モデル」は、実は、前節の最後で言及した、障害を個人的問題とみなす「個人モデル」の対極に位置する。

シェイクスピアによると、イギリスの障害の社会モデルの重要な要素は、「社会的排除」である「ディスアビリティ」と、「身体的制約」である「インペアメント」を区別すること、そして障害をもつ人々は抑圧されたグループであると主張することである (“the distinction between disability (social exclusion) and impairment (physical limitation) and claim that disabled people are an oppressed group”) (Shakespeare 215, emphasis mine)。その後、「ディスアビリティ」の定義は、1975年のUPIASの考えに基づいて、「身体的な制約をもつ人々を考慮に入れず、それゆえ社会活動の主流への参加から排除している現代の社会組織によって引き起こされる、活動における不利あるいは制限」 (“the disadvantage or restriction of activity caused by a contemporary social organization which takes little or no account of people who have physical impairments and thus excludes them from participation in the mainstream of social activities”) となる (Shakespeare 215)。

ここで、これらの定義に従って、先に紹介した登場人物について再考したい。なお、定義内の「現代の社会組織」については、文脈を汲み取り、「当時の社会組織」とおきかえることとする。

まず、ワン・ルンに土地取引をもちかけた男性は、片眼に視覚障害というイ

ンペアメントをもっている。しかし、土地の取引をしながら社会を渡り歩いていることから、ディスアビリティはないといえる。また、ワン・ザ・タイガーの下で働く部下の男性は、口元に損傷というインペアメントをもっているが、信頼されて大きな仕事を行っていることから、やはりディスアビリティはないといえる。そして、ワン・ルンの長男の三男である男性は、背中の湾曲と肩の隆起というインペアメントのために、軍人になるという社会活動の主流への参加から排除され、活動における不利あるいは制限がみられるため、ディスアビリティを認めることができる。しかし、寺で僧侶になったため、決定的なディスアビリティには直面していないといえる。なお、ワン・ルンの知的障害をもつ長女については、障害の社会モデルに従って考察することに困難を覚えることを否めない。なぜなら、知的障害というインペアメントを認めることはできるが、ディスアビリティについて考察する際、ワン・ルンあるいはペア・ブロッサムからの支援も考慮すべきだと思われるからである。そこで、ワン・ルンとペア・ブロッサムから全面的に支援されているというプロット通りの条件下においては、長女は決定的なディスアビリティはもっていない、としたい。

このように、ここで考察した4人の登場人物は、インペアメントはもっているけれども、決定的なディスアビリティをもっていない。すなわち、インペアメントとディスアビリティという区別をしていたかどうかはともかくも、バックは「障害をもつ人々の居場所がある社会」という考えに基づいて、『大地』と『息子たち』を執筆したといえるのである。

最後に、障害学の視点から、『大地』と『息子たち』に読み取ることができる、2つの重要な観点について言及したい。1点目は、先に述べたワン・ルンの長男の三男は、社会において居場所を見つけることはできたが、希望通りに軍人になることはできず、この男性の描写には、寂寥感がにじんでいる。この男性は、実は障害学における重要な論点の1つである「能力主義」(“the ideology of ability”)について問題提起している。この論点は、彼に対してワン・ザ・タイガーが発する、次の言葉に特に強く認められる——“I wish you well, poor lad, and if you had been able, I would have taken you gladly as I took your cousin and I would have done as well for you as I have done for him . . .” (Buck, *Sons* 293, emphasis mine)。そして2点目は、知的障害をもつ長女の主体性の描写の乏しさ、である。ここには障害をもつ人々と自己決定という論点<sup>20</sup>が潜んでいるのである。

このように、優生学の影響下にあった1930年代初頭に執筆された2作品の登場人物を、イギリス障害学の社会モデルによって考察すると、「障害をもつ人々

の居場所がある社会」というバックの世界観が浮かび上がってくる。ここには、現代の障害学における論点を読み取ることも可能なのである。

### まとめ

本論では、知的障害をもつ女性が主人公の長女として登場することに着目して、『大地』と『息子たち』を、障害学の視点から考察してきた。主人公ワン・ルンの知的障害をもつ長女に対する愛情は、長女が話をしないことをワン・ルンが嘆くシーンで深まっており、バックの実生活における経験が、このシーンに影響を与えていることを論じた。また、家長であるワン・ルンが、知的障害をもつ長女と常に一緒に生活し、ワン・ルンの死後は、ワン・ルンの第三夫人のペア・ブロッサムが長女を世話しながら一緒に生活する様子を考察した。同時代に発表された他作品と比べて、優生学の影響下にあった1930年代初頭に、知的障害をもつ人が、施設に収容されず、地域社会で暮らす様子が描写されていることは特筆すべきである。そして同時に、地域社会において長女を守りながら生活する家族の描写は、障害を個人的問題にとらえることに対する問題を提示していることを指摘した。さらにこれらの2作品に登場する3人の障害をもつと思われる登場人物を、イギリス障害学の社会モデルの理論に従って考察した。これらの人物は、インペアメントをもっているが、決定的なディスアビリティはもっていない人物として描かれている。バックがインペアメントとディスアビリティについて区別していたかはともかくも、このことは、バックが1930年初頭において、「障害をもつ人々の居場所がある社会」という考えに基づいて、これらの2作品を執筆した可能性を示している。

2016年の現在、多くの国が国際連合総会において採択された障害者権利条約に批准し、障害者の権利を保障する法整備が進みつつある。様々な問題に直面しながらも、障害をもつ人々をとりまく社会状況は、劇的に変わりつつある。しかしながら、個人個人に焦点を当てると、まだまだ問題は山積しているといえる。こうした問題の解決に向けて、障害学の視点は、今後ますます重要な役割を果たすと思われる。そして、この障害学の視点によって、およそ一世紀前に創作されたフィクションという媒体を読み直し、現代社会における問題を考える試みも、決して無意味なことではないと思われるのである。

※本稿は日本アメリカ文学会中部支部9月例会(2014年9月20日、於椋山女学園大学)での発表原稿に大幅に加筆修正を施したものである。貴重な質疑に感謝申し上げます。



註

- 1 ADA については、八代英太、富安芳和編『ADA（障害をもつアメリカ人法）の衝撃』に詳しい。その他のアメリカの障害者の権利保障に関する法律としては、「1973 年リハビリテーション法」(Rehabilitation Act of 1973)、「1998 年リハビリテーション法」(Rehabilitation Act of 1998) などがよく知られており、障害保健福祉研究情報システム「米国リハビリテーション法 508 条－内容と影響－」を参照されたい。また世界保健機構 (World Health Organization (WHO)) では、「国際障害分類初版」(International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps (ICIDH)) に関する議論が交わされてきたが、2001 年に「生物－心理－社会モデル」(biopsychosocial model) を採用する「国際生活機能分類」(International Classification of Functioning, Disabilities and Health (ICF)) という、いわば折衷案が採択され一応の決着をみたが、議論の余地はまだあるという (杉野 47-70)。さらに 2006 年の第 61 回国際連合総会で採択され、2008 年に発効した「障害者権利条約」(Convention on the Rights of Persons with Disabilities) については、障害保健福祉研究情報システム「国連障害者の権利条約」を参照されたい。日本は同条約に 2014 年に批准し、同年効力が発効した。なお日本では、平成 25 年 6 月に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(いわゆる「障害者差別解消法」) が制定され、同法における「合理的配慮規定等が平成 28 年 4 月に施行されることとなっており、政府では基本方針を策定し、それを踏まえて各行政機関 (国立大学法人等を含む) や各大臣は対応要領、対応指針を策定することとなっており、大学等における体制の強化が喫緊の課題」となっている (日本聴覚障害学生 5)。
- 2 優生学の視点で文学を論じたものに Childs がある。
- 3 Appendix は 1946 年にフォークナーによって執筆されたとされており (Faulkner 323)、Modern Library 版 (1946) においてはテキスト巻頭に掲載されるが、それ以降の出版においては巻末に掲載されるようになった。
- 4 バックは NAACP (National Association for the Advancement of Colored People、全米有色人種向上協会) の機関紙 *Crisis* に、たびたび寄稿している (Conn xvi, 250, 305)。またバックと Eleanor Roosevelt は、アフリカ系アメリカ人を最も理解しているアメリカの白人として、NAACP 事務局長の Walter White から称揚された (Conn xvi)。
- 5 バックは日系アメリカ人の著名な画家である国吉康雄と交友があった (Conn 251)。国吉は、原爆開発と投下に一石を投じる *Command the Morning* (1957) に登場する、日系アメリカ人画家のモデルとなっていると考えられる。1942 年 2 月に日系人強制収容を示唆する大統領令 9066 号が発布されるが、その 2 ヶ月後の 4 月に、バック

- クは Japanese-American Committee for Democracy において日系人強制収容に対する警鐘を鳴らし、ローズベルト大統領夫人にあてて手紙を出している (Conn 264)。
- 6 例えば Works Cited に挙げた於保は親の眼差しに着目し、松坂は臨床心理士として障害の受容に着目している。
  - 7 クレーマーによる博士論文は、バックの *The Child Who Never Grew* (1950) と、Dale Evans Rogers, *Angel Unaware: A Touching Story of Love and Loss* (1953)、Michael Anthony Dorris, *The Broken Code* (1987)、H. Rutherford Turnbull, *The Exceptional Life of Jay Turnbull: Disability and Dignity in America 1967-2009* について、障害に着目して比較考察している。
  - 8 バックと 2 人目の夫 Richard J. Walsh に関する原稿、書簡、雑誌記事、経営報告書などは、パール・バック国際財団でアーカイヴとして保管され、公開されている。
  - 9 当初同エッセイは雑誌に掲載されたが、同年、単行本として出版された。
  - 10 「社会モデル」にはイギリス版とアメリカ版があるが、それぞれの議論は混迷を深めているという (杉野 113)。
  - 11 Tobin Siebers は、*Disability Theory* のイントロダクションに、Disability Identity という項目立てをして、次のように述べている、“Disability is not a physical or mental defect but a cultural and minority identity. To call disability an identity is to recognize that it is not a biological or natural property but an elastic social category both subject to social control and capable of effecting social change. . . . d[D]isability has both negative and positive usages in disability studies, and unless one remains vigilant about usage, a great deal of confusion will result. . . . Many disability theorists—and I count myself among them—would argue that disability as an identity is never negative” (Siebers 4)。
  - 12 杉野は、障害当事者の親が「必ずしも当事者視点を共有しているわけではない」(杉野 35) ことの例として、注で「ろう児の父親」であった西川吉之助をあげ、「大正期の日本のろう教育における口話法の定着」に重要な役割を果たしたが、「手話の排斥」にも重要な役割を果たしたと指摘している (杉野 43)。
  - 13 長女には名前がつけられていない。このことに着目する論考もみられるが、筆者は、ワン・ルンの 3 人の息子たちも成長するまで名前がつけられていないことに鑑みると、長女が名前をもたないことはそれほど重要ではないと考える。むしろ、名付けということを通して見えてくるのは、名前をつける立場にあるワン・ルンについての、素朴でこだわりをもたない人物像の設定ではないかと思われる。確かに、三人の息子は名前をつけたほうがよいとの助言をうけるが、長女はそのような助言

の対象になっていないことは指摘できよう。

- 14 長女を指して fool と呼ぶ回数は、数えた限りでは、合計 39 回である。母親のオーランは、長女を指して poor fool あるいは the poor fool と、それぞれ 1 回ずつ呼ぶ。ペア・ブロッサムは、this poor fool と 1 回だけ呼んでいる。そして語り手は、the poor fool、his poor fool、the fool、his fool、poor fool という 5 通りの呼び方であわせて 21 回呼ぶ。なかでも一番多いのは his poor fool という呼び方であり、9 回見られる。そしてワン・ルンが長女を指して fool と呼びかける回数は、語り手に次いで多く、あわせて 15 回である。
- 15 Pam は、中国の家父長制は女性を財産として扱っているという、ジェンダーに着目した視点で『大地』を分析している。筆者も、バックが家父長制に対して非難的であることは、小説や短編に読み取ることができる。しかし『大地』には、家父長制を逆手にとり、家父長が知的障害をもつ長女を家族内において守り通す構造を構築している側面も認められる。障害をもつ長女を守る役割が、母親のオーランではなく父親のワン・ルンにある理由は、ここにあると推測する。
- 16 優生学と障害の関係を論じているものとしては、例えば Levine らのものがある。また Yuehtsen Juliette Chung, "Eugenics in China and Hong Kong: Nationalism and Colonialism, 1890s-1940s"によると、中国において優生学は、西洋における様相とは異なるものの、1890 年代から中国の政治改革における重要な要素 ("important element in Chinese political reforms") として存在していたという (Chung 258)。
- 17 「ノーマライゼーションの原理」については、ベンクト・ニリエ『再考・ノーマライゼーションの原理——その広がりと言義』を参照されたい。
- 18 杉野は、「障害者も含めて一般の人々の多くは、障害をもった本人や、障害児を産んだ親が不運なのだと考えていて、障害者に仕事を与えない社会や企業が悪いとは考えていない。また、障害は個人の不幸や不運（個人モデル）なのだから、(中略) 多くの障害児の親は子どもの面倒を自分だけで抱え込もうとする。しかし、もしも私たちがそうした親の姿勢を認めてしまえば、親が障害のある自分の子を殺すことは止められない。親に対してその子どもの障害は社会の負担なのだと言得できなければ、障害児殺しは止められないのである。そこに、障害原因を徹底的に社会に帰属させていく概念モデルの政治的重要性がある。(中略) そのためには、「障害」概念を個人と社会、インペアメントとディスアビリティとに二元的に分解することがどうしても必要になる」と指摘している (杉野 118)。
- 19 アメリカの社会モデルは、イギリスの社会モデルよりも差別により着眼したものとなっており、stigma 理論が重要といえる。Erving Goffman は、スティグマを次

のようにおおまかにタイプわけしている、“Three grossly different types of stigma may be mentioned. First there are abominations of the body—the various physical deformities. Next there are blemishes of individual character. . . inferred from a known record of, for example, mental disorder, imprisonment, addiction, alcoholism, homosexuality, unemployment, suicide attempts, and radical political behavior. Finally there are the tribal stigma of race, nation, and religion. . .”

(Goffman 205)。また Lerita M. Coleman は、スティグマの働きについて次のように分析している、“Stigma often results in a special kind of downward mobility. Part of the power of stigmatization lies in the realization that people who are stigmatized or acquire a stigma lose their place in the social hierarchy. Consequently, most people want to ensure that they are counted in the nonstigmatized ‘majority’” (Coleman 218)。

20 本論点の議論については立岩を参照されたい。

### Works Cited

Brunauer, Dalma H. “Pearl S. Buck in Japan.” *Journal of Evolutionary Psychology* 13. 3-4 (1999): 172-82. Print.

Buck, Pearl S. *The Child Who Never Grew*. 1950. N.p.: Woodbine House, 1992. Print.

---. *Command the Morning*. New York: John Day, 1959. Print.

---. *East Wind: West Wind*. 1930. New York: John Day, 1957. Print.

---. *The Good Earth*. 1931. New York: Washington Square, 2004. Print.

---. *The Mother*. 1934. London: Magnum, 1978. Print.

---. *Sons*. 1932. Kingston, RI: Moyer Bell, 2008. Print.

Childs, Donald J. *Modernism and Eugenics: Woolf, Eliot, Yeats, and the Culture of Degeneration*. Cambridge: Cambridge UP, 2001. Print.

Chung, Yuehtsen Juliette. “Eugenics in China and Hong Kong: Nationalism and Colonialism, 1890s-1940s.” *The Oxford Handbook of The History of Eugenics*. Ed. Alison Bashford, and Philippa Levine. New York: Oxford UP, 2010. 258-273. Print.

Coleman, Lerita M. “Stigma: An Enigma Demystified.” *The Disability Studies Reader*. 1st ed. Ed. Lennard J. Davis. New York: Routledge, 1997. 216-31. Print.

Conn, Peter. *Pearl S. Buck: A Cultural Biography*. Cambridge: Press Syndicate of the U of Cambridge, 1996. Print.

Davis, Lennard J. “Introduction: Normality, Power, and Culture.” *The Disability*

- Studies Reader*. 4th ed. Ed. Lennard J. Davis. New York: Routledge, 2013. 1-14. Print.
- Doyle, Paul A. *Pearl S. Buck*. New York: Twayne, 1965. Print.
- Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. 1929. New York: Vintage, 1990. Print.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. London: Penguin, 1950. Print.
- 夫馬進. 『中国善会善堂史研究』 同朋舎出版, 1997. Print.
- Ginsburg, Faye, and Rayna Rapp. "Enabling Disability: Rewriting Kinship, Reimagining Citizenship." *The Disability Studies Reader*. 4th ed. Ed. Lennard J. Davis. New York: Routledge, 2013. 185-201. Print.
- Goffman, Erving. "Selections from *Stigma*." *The Disability Studies Reader*. 1st ed. Ed. Lennard J. Davis. New York: Routledge, 1997. 203-15. Print.
- 加美山慎一. 「米国リハビリテーション法 508 条—内容と影響—」『障害保健福祉研究情報システム』 Web. 5 Jan. 2015.
- 「国連障害者の権利条約」『障害保健福祉研究情報システム』 Web. 5 Jan. 2015.
- Kramer, Margaret Rayburn. "Plotting Life Writing through Various Disability Models." *DAI* 74. 4 (2013): DA3545833. U of Kansas. Web. 26 Sep 2014.
- Levine, Philippa, and Alison Bashford. "Introduction: Eugenics and the Modern World." *The Oxford Handbook of The History of Eugenics*. Oxford: Oxford UP, 2010. 3-24. Print.
- 松坂清俊. 『知的障害の娘の母——パール・バック ノーベル文学賞を越えて』 文芸社, 2008. Print.
- Meyer, Mike. "Pearl of the Orient." *New York Times Book Review* 5 Mar (2006): 23. Print.
- 長瀬修. 「障害学に向けて」『障害学への招待』石川准, 長瀬修編. 明石書店, 1999. 11-39. Print.
- 日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム実行委員会. 『第10回 日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム』 2014. Print.
- ニリエ, ベンクト. 『再考・ノーマライゼーションの原理——その広がり と 現代的意義』ハンソン友子訳. 現代書館, 2008. Print.
- 於保真理. 「文学にみる障害者像 パール・バック 著『大地』——知的障害のある娘への親の眼差し」『ノーマライゼーション 障害者の福祉 2004年8月号』 Web. 15 Jan. 2015.
- Pam, Eleanor. "Patriarchy and Property: Women in Pearl S. Buck's *The Good Earth* (1931)." *Women in Literature: Reading through the Lens of Gender*. Ed. Jerilyn Fisher,

- and Ellen S. Silber. N.p.: Greenwood, 2003. 121-23. Print.
- Raessler, Deborah Clement. "Pearl S. Buck's Writings on Handicapped Children." *The Several Worlds of Pearl S. Buck: Essays Presented at a Centennial Symposium, Randolph-Macon Woman's College, March 26-28, 1992*. Ed. Elizabeth J. Lipscomb, Frances E. Webb, and Peter Conn. Westport, CT: Greenwood, 1994. 81-99. Print.
- Shakespeare, Tom. "The Social Model of Disability." *The Disability Studies Reader*. 4th ed. Ed. Lennard J. Davis. New York: Routledge, 2013. 214-21. Print.
- Siebers, Tobin. *Disability Theory*. 4th ed. Ann Arbor: U of Michigan P, 2011. Print.
- Steinbeck, John. *Of Mice and Men*. 1937. New York: Penguin, 1993. Print.
- 杉野昭博. 『障害学——理論形成と射程』 東京大学出版会, 2007. Print.
- 立岩真也. 『弱くある自由へ——自己決定、介護、生死の技術』 青土社, 2000. Print.
- 八代英太, 富安芳和編. 『ADA (障害をもつアメリカ人法) の衝撃』 学苑社, 1991. Print.
- Yoshihara, Mari. *Women's Asia: American Women and the Gendering of American Orientalism 1870s-WWII*. 1997. Brown U. UMI, 1999. Print.
- Zola, Irving Kenneth. *Missing Pieces: A Chronicle of Living With a Disability*. Philadelphia: Temple UP, 1982. Print.